

[論文]

カール・バルトのエキュメニカルな神学への道(2)

——世界教会運動との関わりの中で——

佐藤 司 郎

はじめに

- (一) エキュメニズムとバルト
- (二) エキュメニカルな教会論——『教会と諸教会』〔以上, 前号〕
- (三) バルトのエキュメニズムの諸相〔本号〕
 - (1) ボンヘッフアーとバルト
 - (2) フィセルト・ホーフトとバルト〔以下, 次号〕
 - (3) アムステルダムとその余韻

むすび

(三) バルトのエキュメニズムの諸相

(1) ボンヘッフアーとバルト

バルトのエキュメニズムへの覚醒の契機は、1934年5月のバルメンにおける告白会議とそこで採択された信仰告白、すなわち『バルメン神学宣言』であった¹。連続講義『教会と諸教会』（1935年7月）はそれを背景に理解されなければならない。「教会に真剣な意味で立てられている課題という意味での諸教会〔諸教派〕の統一は、疑いもなく、一つの一一致した信仰告白へ向けての諸信仰告白の統一を意味するであろう」²。ここではっきり想起されているのはバルメンの出来事であり、それはまた世界教会運動へのバルトの問いで

¹ 起草者バルトにおいて当時もまた後々も『バルメン神学的宣言』は信仰告白と考えられていた。Vgl. K.Barth, Barmen, 1952, in: Texte zur Barmer Theologischen Erklärung, S.161. 以下を参照せよ、拙稿「ナチズムとバルト——『バルメン宣言』第三項を巡って」（宮田・柳父編『ナチ・ドイツの政治思想』2002年）。

² K.Barth, Die Kirche und die Kirchen, in: Theologische Fragen und Antworten, S.226.

もあった。

バルトと異なり早くから世界教会運動に参加していた少壮の神学者ボンヘッファーにとっても³、バルメンとダーレムの線で開始された教会闘争は、世界教会運動にとって一つの画期を意味するものと受けとめられていた。「ドイツ教会闘争は、世界教会運動の開始以後の、その歴史における第二の大きな段階を画するものであり、決定的な仕方において、この運動の将来をも共に規定するものとなるであろう」⁴。1935年夏に記されたこの言葉に、「世界教会」(die Ökumene)と「告白教会」(die Bekennende Kirche)との連帯にかけるボンヘッファーの期待を読みとることは難しくない。

かくてバルトにおいてもボンヘッファーにおいても、教会闘争は、前者においてはエキュメニズムへの覚醒の、後者においては、まだ草創期の世界教会運動の中で、その方向性を示唆する決定的出来事となった。本項では、1932～35年のボンヘッファーの三つの主要な文書を取り上げて、教会闘争のただ中で彼が参与し、かつ構想した世界教会運動を瞥見し、その上でバルトとの関係を考えてみたい。

a) 1932年7月——ボンヘッファーの世界教会運動への参与の半年後、ヒトラーの政権奪取の半年前——、世界連盟(Weltbund)の「国際青年平和協議会」の折、チェコのチェルノホルスケ教会でなされた重要な講演「世界連盟の活動の神学的基礎づけへの試み」をはじめに取り上げる。

この講演は、とくに今日、ボンヘッファーの平和主義という観点から読み直され⁵、じっ

³ アメリカから帰国しベルリン大学神学部私講師に就任した25歳のボンヘッファーはベルリンの前総教区長ディーステルの推薦により、1931年9月、ケンブリッジで開催された世界教会の「教会を通して国際友好を促進する世界連盟」(WFK=Weltbund für internationale Freundschaftsarbeit der Kirchen)の年次総会に参加し——ディーステルのねばり強い説得だけでなく、E.ベートゲが教示しているように、平和問題、すなわち、「ドイツ国内に起こってきた平和を排斥する新しい動き」が彼の参加を促した——、そこで世界連盟青年委員会の新たな三人の書記の一人に選出された。これが世界教会運動との直接の関係の始まりである。彼は草創期の世界教会運動に関わり、1937年2月、「生活と実践」のオクスフォード大会の準備のためのロンドン委員会後書記を辞した。以下、参照。J. Glenthoj, Dietrich Bonhoeffer und Ökumene, in: Die Mündige Welt, Bd.II, 1956. / E.Bethge, Dietrich Bonhoeffer, Eine Biographie, 1967/86. (以下、DBと略記。村上、雨宮、森野訳『ボンヘッファー伝』1～4) / Visser't Hooft, Dietrich Bonhoeffer and the Self-understanding of the Ecumenical Movement, in: The Ecumenical Review, Vol.28, issue 2, 1976. / H.J. マルグル「世界教会運動とボンヘッファー——「告白教会と世界教会」の動機について」(『神学』29巻1966)。/ 神田健次「D・ボンヘッファーとエキュメニカル運動——1932～35年の参与をめぐる」(『神学研究』35号1987)。/ 森野善右衛門「ボンヘッファーと世界教会運動」(『ボンヘッファー研究』16号1999)。

⁴ Bonhoeffer, Die Bekennende Kirche und die Ökumene, DBW14, S.379. (森野善右衛門訳「告白教会と世界教会」『告白教会と世界教会』127頁——以下頁数のみ記す)。

⁵ Vgl. H.E.Tödt, Dietrich Bonhoeffers ökumenische Friedensethik, in: H.Pfeifer (Hg.), Frieden, das unumgängliche Wagnis, 1982 (「ボンヘッファーによる世界教会の平和倫理」『平和の神学』所収) / W.Huber, Ein ökumenische Konzil des Friedens — Hoffnungen und Hemmnisse, in: Ökumenische

さいなお訴える力を失っていない。ただここでは、主として、彼の世界教会運動論という観点から取り上げられることになる。

協議会では、彼の掲げた主題そのものが参加者には余計なもの・退屈なものと思われただけでなく、世界教会運動に対する彼の厳しい要求に賛意を表したのはごくわずかであったと言う⁶。

講演を彼は「世界教会運動の神学はまだ存在していない」⁷といささか挑戦的に語りはじめ、とり分け世界教会運動のドイツにおける憂うべき状況を念頭において⁸、「世界教会の活動がそれに沿って進むべき明確な神学的な線を、その時々適切に労苦して生み出す努力を怠っていた」⁹ことを指摘し、「われわれの事柄の真実さと確かさとのために、世界教会運動の責任ある神学」¹⁰を要求した。ボンヘッファーにとってこうした要求ないし問いは、「われわれの事柄」という言い方に表れているように、決して「外側から、傍観者の無関心な場所から」¹¹なされているのではなく、「無条件に内側から」¹²提出されたものであった。こうして神学的基礎づけを問うことは世界教会運動の古い実践家には強い批判として聞こえたであろう。

「責任ある神学」の輪郭を所論にしたがって辿ってみよう。ボンヘッファーは世界連盟を「時代に適用しようとする一個の新しい教會的目的組織」¹³とは見ない、そうではなく

Existenz heute 1, 1986 / M.Heimbuher, Christusfriede—Weltfrieden, 1997 / 森野善右衛門「ボンヘッファーの平和倫理」(『ボンヘッファー研究』5号 1988.)。/ 森岡巖「ボンヘッファーにおける平和主義の展開」(四国学院『社会科学年誌』第2号, 1~18頁, 1992)。

⁶ E.Bethge, DB, S.294-297. (邦訳, 第2巻, 137~142頁——以下, 巻数と頁数のみ記す)。E.ズッツに宛てた手紙によると, ボンヘッファー自身もこの種の全体協議会に不信感をいだいたまま帰国した (Brief an E.Sutz, Aug.1932, DBW11, S.99f.)。

⁷ Bonhoeffer, Zur theologischen Begründung der Weltbundarbeit, DBW11, S.327. (森野善右衛門訳「世界連盟の運動の神学的基礎づけへの試み」『告白教会と世界教会』7頁——以下頁数のみ記す)。

⁸ エディンバラ世界宣教協議会 (1910年)以来, ドイツの教会においても, エキュメニカル運動は, ベルリンを中心に, A.ダイスマン, E.ジークムント-シュルツェなどによって推進されていた。しかし1920年代の半ば過ぎの「民族性の神学」の台頭とともに (拙稿「神の言はつなげていない——バルメン宣言第六項の意味と射程」『教会と神学』43号, 2006年, 参照), 世界教会の考え方は後退した。その中で, 1931年6月に起こった, ケンブリッジ協議会準備のためのハンブルク協議会に対するエルランゲンのアルトハウスとゲッティンゲンのヒルシュの批判声明が, 協議会開催当日の朝の新聞に掲載された事件は, 翌年になるまで大きな反響を呼び起こした。ボンヘッファーの講演は, そうした状況を踏まえて語られた。声明は, 「諸民族の親善の問題におけるキリスト教的・教會的な協調と協働は, 他の民族がわれわれの民族に対する殺人的な政治をわれわれに対しておこなうかぎり, 不可能だ」と述べていた (Bethge, DB, S.283. 邦訳2, 44頁以下)。

⁹ DBW11, S.329. (9頁)

¹⁰ S.330. (11頁)

¹¹ Ebd.

¹² Ebd.

¹³ S.328. (7頁)

てそれを教会と見る、すなわち、「世界の主である主イエス・キリストの一つの教団」¹⁴に違はなく、そのかぎり「み言葉を全世界に語るという委託」¹⁵をもつ。しかもこの教会は個別教会ではなく「一つのキリストの教会」¹⁶なのであるから、宣教の領域は限定されず、それは全世界だと言わなければならない。「この世界全体が、キリストの領域なのである」¹⁷。ボンヘッファーによれば、イエス・キリストの支配の外に生の自律的領域というものはない。かくて世界連盟を教会と理解するとともに、伝統的なルター主義の二王国説を突破したところで、世界教会運動の課題を次のように言う。

この全世界に対する教会の要求、より適切に言えば、全世界に対する教会の主な要求を言葉で言い表すために、世界連盟の諸教会は共に集められたのである。これらの諸教会は、全世界に対するイエス・キリストの要求を聞き取れるようにすることを教会の課題であると理解している¹⁸。

「全世界に対するイエス・キリストの要求を聞き取れるようにすること」——これがボンヘッファーの考える世界教会運動の課題にほかならない。課題の遂行のために必要な神学的考察をさらに彼は三つの問いを提出して展開する。第一に、教会はいかなる権能において語るのか。第二に、教会の語る言葉、すなわち、福音と戒めとは、いかにして、力をもって、すなわち、全き具体性において、今ここでの言葉として宣べ伝えられるのか。第三に、神の戒めがこの時何であるかを教会はどこから知ることなのか、である。それぞれの考察を簡単にしておこう。第一の問いに対しボンヘッファーは、「教会は、この地上におけるキリストの現在であり、現臨するキリストである (der Christus praesens)」¹⁹ という認識に立って、「教会だけが語ることのできる権能において、すなわち、教会に現臨したもう生けるキリストの権能において」²⁰ と説く。第二の問いについて言えば、教会が戒めを具体的に語るためには現実の状況との関係づけは不可欠である。しかしもし戒めの具体性が状況の認識に依存するとしたら、そこにはかえって戒めの語りの不確かさが生まれる。それでもなお神の戒めとして語られるとすれば、誤りと罪の可能性を免れない。それなら語らない、語

¹⁴ S.331. (11 頁)

¹⁵ Ebd.

¹⁶ Ebd.

¹⁷ S.331. (12 頁)

¹⁸ S.331. (11 頁)

¹⁹ S.331. (12 頁)

²⁰ Ebd.

れないのであろうか。ボンヘッファーは、これまで多くの教会が取ってきた道、すなわち、「問題回避と原則の段階への後退」²¹の道を取らない。むしろ「あらゆる危険を冒して何事かをあえてなす道」²²を取る。たとえば、「この戦争には参加するな」というような戒めを「神の戒めとしてあえて語る」²³のである。そうであれば、こうした「戒めの宣教は、罪の赦しの宣教によって基礎づけられる」²⁴ほかないであろう。そこで第三の問い、すなわち、教会はどこから戒めを聞くのか。ボンヘッファーによれば、戒めの認識は「神の啓示の行為」²⁵である。それをどこで聞くかと言えば、一つは「聖書の律法、山上の説教」²⁶、もう一つは「創造の秩序」と言うほかない。しかし彼によれば、両者ともそのままわれわれの聞くべき戒めの啓示なのではない。すでにボンヘッファーは、いまわれわれの確認したように、教会の語りの権能を問い、教会の言葉は今も生きたもうキリストの言葉だと語った。戒めもまたキリストから来るのでなければならぬ。「キリストからのみ、われわれは、われわれが何をなすべきか、知らなければならぬ」²⁷。山上の説教について言えば、それを語った預言者キリストからではなく、神の戒めを成就し新しい世界をもたらし、約束したもう方としてのキリストから聞くのだし、創造の秩序について言えば²⁸、墮落した創造の秩序はキリストにおいて新しい光のもとに現れる。創造の秩序は神の戒めの啓示ではなく、それがキリストに対して開かれているかぎり、保持の秩序としてのみ存続する。したがって「教会は、この世界の秩序が歴史的に移り変わって行く中であって、ただ、どの秩序が、この世界の罪と死への根本的転落を最も早く止めることができ、かつ福音にその道を用意することができるのか、ということだけに注目すべきである」²⁹。この秩序こそ、まさに、彼によれば、今日、「国際平和の秩序」³⁰にほかならなかつた。教会が語るのは、何か理想とか、目標とか言うものではない。そうではなくて神の意志の具体的要求なのであ

²¹ S.333. (15 頁)

²² Ebd.

²³ S.334. (15 頁)

²⁴ S.334. (16 頁)

²⁵ S.335. (17 頁)

²⁶ S.335. (17 頁)

²⁷ S.336. (19 頁)

²⁸ 講演の3ヶ月前(1932年4月29~30日)、ドイツ国内の協議会での「創造の秩序」と「保持の秩序」を巡るW.シュテーリンとボンヘッファーの論争については、Bethge, DB, S.288ff. (邦訳2, 127頁)。神田、前掲論文128頁以下を参照せよ。ボンヘッファーとシュテーリン共同の署名のある同協議会の報告は、DBW11, S.131-138。なおこの時期、創造の秩序に代わって用いられた保持の秩序の概念も新ルター主義の誤った用い方であるとしてその後使われなくなった(テート、前掲論文、202頁、参照)。

²⁹ S.337. (20 頁)

³⁰ S.338. (21 頁)

り、神の戒めであり、それゆえ求められているのは、われわれの服従なのである。

われわれのここでの主たる関心はボンヘッファーの世界教会論を明らかにすることにあるが、それは彼の平和主義の検討なしに果たされない。彼の平和の倫理の輪郭が辿られなければならない。

ボンヘッファーはここで、一方で、世界連盟に影響を与えてきたアングロサクソンの世界内在的、理想追求的な平和思想を批判し、他方で、ドイツ・ルター主義の神学、とくにアルトハウス、ヒルシュに代表される世界教会批判などと対決しながら、自らの平和理解を展開した。彼によれば、アングロサクソンの考え方では、平和は「福音の現実として、さらには地上における神の国の一部分」³¹、「究極的な、それ自身において価値ある完成の秩序」³²として理想化され絶対化されて受け取られる。「外的平和は、それとして《はなはだ良い》状態」³³ということになる。しかしボンヘッファーによれば、この平和が「真理と正義」³⁴ではなく「虚偽と不正」³⁵に基づくなら、それは破られなければならない、闘いが宣せられねばならない。もしその闘いが、両方の側で真に真理と正義のためになされるなら、たとえ平和が外的には破れても、その闘いの中で、平和の交わりはよりいっそう深くかつ強く実現される。その時しかし、一方の側が、利己的な目標のためにしか闘っていないことが明らかになったときには、今言った平和の交わりの形も破られて、「すべての平和の交わりを支える究極的な、唯一の根拠である、罪の赦しの現実」³⁶が現れる。「一方が他方に対してその罪を赦そうとするがゆえに、ただそのことのゆえに、キリスト者にとって平和の交わりは存在する。罪の赦しは、外的平和の秩序が真理と正義によって保証されているところにおいてもなお、あらゆる平和の唯一の根拠でありつづける。したがって罪の赦しは、すべての世界教会の活動が拠るべき究極の根拠であり、そのことは、互いに引き裂かれていて希望を見出しえないところにおいてこそ、そうなのである」³⁷。「罪の赦しをもたらず神の平和」、これのみが福音の現実であり、そこで真理と正義は共に成就される。ボンヘッファーの明らかにした、これがキリスト者にとっての究極の平和であった。

この講演をボンヘッファーは、世界教会の活動の神学を要求することから始め、国際平和の秩序を今ここで語られるべき神の戒めとして明らかにしただけではなかった。当時の

³¹ Ebd.

³² Ebd.

³³ S.338f. (22 頁)

³⁴ S.339. (22 頁)

³⁵ Ebd.

³⁶ Ebd.

³⁷ S.339. (22 頁以下)

ルター主義教会の戦争容認に対して³⁸、はっきりこれを否定した。虚偽と不正の平和に対する「闘い」(Kampf)が不可避であることは、「戦争」(Krieg)の正当化を意味しない、闘いは保持の秩序に属するが、戦争はそれに属さない、と。

今日の戦争は、人間の魂と肉体とを絶滅させる。…、したがって将来起こりうるべき戦争は、教会によって全く拒否されねばならない³⁹。

さらにボンヘッファーは、神の意志は、戦争無き「状態の新しい創造」⁴⁰にも向けられていると主張した。「創造を元通りに回復することは、われわれにできることではない。しかし神の戒めの下にあってわれわれは、今日命じたもう神がいつかご自分でなしたもうであろうことに関連して、すなわち、キリストによる新しい創造に関連して良くあるような状態をつくり出すべきである」⁴¹。ここで重要なのは「…に関連して」である。われわれが神の戒めのもとにつくり出すことを求められているのは、つまり、神の新しい創造との関連で良い状態にほかならない。そのようなものとして戦争を克服する平和は良いのである。それゆえ次のように言う。

世界連盟に集まった教会は、キリスト教界に向かって、罪の赦しに基づく神の戒めとしての教会の言葉を聞くようにと語る。しかし教会は、世界に向かってても、世界が現在の状態を変革するようにと語るのである〔傍点、筆者〕⁴²。

さて世界連盟自体は、どのように平和に貢献するのであろうか。それを最後にボンヘッファーは取りあげる。彼によれば、そのために世界連盟における「相互理解」⁴³はむしろ大切である。しかしそれが最も重要なことではない。「他の何ものにもまさって、われわれが今日の世界教会運動において必要としているのは、一つの、大きな、われわれを一緒にするメッセージ(Verkündigung)である。われわれは幻想を抱こうとは思わない。すなわち、われわれは、このようなメッセージをまだ持っていない。世界教会運動の語る言葉

³⁸ Vgl. M.Heimbucher, AaO. 76f.

³⁹ S.341. (24 頁)

⁴⁰ S.342. (25 頁)

⁴¹ Ebd.

⁴² S.343. (27 頁)

⁴³ S.342. (26 頁)

は——すべてのものにもかかわらず——弱い」⁴⁴。ボンヘッファーには、この時、世界教会運動は神学をまだ持たないだけでなく、共に語るべき宣教の言葉も持っていないように見えた。

b) 1934年8月24～30日——バルメン告白会議からおおよそ三ヶ月後、レーム暴動、オーストリア宰相ドルフス暗殺、ヒンデンプルクの死後ヒトラーが大統領と首相の権限を兼ね^{フューラー}「総統」として新たな権力固めに入った時期——のファネー会議での講話を、次に取り上げる。

ファネー会議の名で知られる協議会は、周知のように1937年オクスフォードで開催予定の世界会議の準備ために、デンマークのファネー島で、世界教会の執行委員会と「生活と実践」世界会議の共同で開かれた。最終日に採択された『決議』、すなわち、「ドイツの教会の状況に対する実践的キリスト教の世界教会評議会（ÖRPC）の決議」⁴⁵はドイツ的キリスト者を批判しそれと対立するものとして明確に告白教会の立場に立った決議として決定的な意味をもった。「生活と実践」世界会議議長 J. ベルと世界連盟議長 O.V. アムンゼン監督が重要な貢献をなしたほか、ボンヘッファーは青年書記としてきわめて困難な事前準備に当たり、招待されていた告白教会総会議長の K. コッホが参加を見合わせる中、イギリスからの講師として、同時に告白教会の代表として参加し、重要な講演と説教の任に当たった⁴⁶。バルメンの出来事を受け、帝国教会を排し告白教会の立場を世界教会で貫くことをした。

残された二つの文書のうち、はじめに大会第二日目になされた「教会と諸民族の世界——世界連盟の活動の神学的基礎づけに関する暫定的な構想」を取り上げる。もとの原稿は失われ、テーゼの記された要旨のみが残されている。

彼ははじめに、世界連盟は何らかの目的団体ではなく教会であるという自己理解を決定的なこととして提示する。二年前のチェルノホルスケ教会の講演と、その点で立場は変わらない。しかしチェルノホルスケでなされた世界教会運動の基礎づけのための神学的考察のようなものは一切省かれ、「世界連盟とは諸民族の間での平和のための教会の活動を意味する」⁴⁷として、平和が集中的に語られた。諸民族に向けてキリストの平和の誠めを拘束力ある言葉として宣べ伝える絶好期と彼は考えた（H.E. テート）。

⁴⁴ S.342. (26 頁)

⁴⁵ A.Boyens, *Kirchenkampf und Ökumene 1933-39*, S.337.

⁴⁶ Bethge, DB, S.431-454. (邦訳 2, 351 頁以下), 参照。

⁴⁷ Bonhoeffer, *Die Kirche und die Welt der Nationen (Zur theologischen Grundlegung der Arbeit des Weltbundes)*, DBW13, S.295-297. ——以下、引用頁数の表記を省略。

ボンヘッファーははじめに「戦争とは何か」を示し、次いでその戦争を正当化する論理と、世俗的な立場からする平和主義の論理に言及し、最後に、それらを共に「非キリスト教的に」、すなわち「キリストから立論せず、願わしいあるいは願わしくない世界像から立論している」として批判し、「キリスト教会」の立場を明示しようとした。まず戦争の正当化の論理に対してボンヘッファーは、「人間の意志」が、つまりすべての人間が「汝殺すなかれ」という神の戒めの前に直面させられていることを指摘し、それに徹底して従うことが要求されているとした。その徹底した要求の前には、「国家は保持されなければならない」とか、「民族は自らを守らなければならない」とか、さらには「隣人愛が私をそうさせる」といった抗弁も、何の権利ももたない。次に、世俗的平和主義に対してボンヘッファーは、戦争を「自然主義的-唯物論的に」理解せず、「悪魔的諸力」によるものと見、それゆえそれは「ただキリストご自身によってのみ」追い払われる、そのために必要なのは「宿命論でも組織でもない、そうではなく祈りだ」と語った。「助けと救いはただ神ご自身からしか来ない」。チェルノホルスケで語られた、教会は世界に向かって「現在の状態を変革するように」と呼びかけなければならないというような言葉は語られなかった。同じくチェルノホルスケで、「絶対平和主義」(Pazifismus) という言葉も恐れるべきではないとされていたのに対し、ここでは留保された。「世に勝った勝利は、絶対平和主義ではなく、信仰だ」。この信仰、「すべてを神から期待し、キリストの再来とその支配を希望する」信仰が強調された。

もう一つの文書、8月28日朝の小礼拝の説教「教会と諸民族の世界」は、ボンヘッファーの最も力強い平和の説教であった。聖書のテキストは詩編85編9節、聴衆に深い感銘を残した。

ここではしかし、ボンヘッファーが「平和はいかにして成るのか」と問い、以下のように述べて世界教会運動に新たな方向づけを与えたことだけを確認しておきたい。

平和はいかにして成るのか。世界がそれを聞き、聞かざるをえないような、すべての民族がそれを喜ばざるをえないような平和への呼びかけを誰がするのか。個々のキリスト者は、そのことをなしえない——彼は確かに、すべてのものが沈黙してるところでも、声をあげ、証しすることができる。しかし、この世の力は、無言のうちに彼を押しつぶしてしまうことができる。個々の教会もまた、確かに証しをなし、苦しむことはできる——ああ、そのことだけでもなせばよいのだが——、しかし、それもまた、憎しみの力によって押しつぶされてしまう。ただ、世界のすべてから集められた、キ

リストの聖なる教会の大いなる全教会会議 (das ökumenische Konzil) だけがそれを語ることができる。世界は、歯ぎしりしながらも、平和についての言葉を聞かざるをえないし、諸民族はその言葉を喜ぶことになる。なぜなら、このキリストの教会は、その子らに、キリストの名において、その手から武器を取り去り、戦争を禁じ、荒れ狂う世界に対してキリストの平和を呼びかけることになるのだから⁴⁸。

教会の言葉の権能が現臨の生けるキリストにあることは、すでにチェルノホルスケの講演で明らかにされていた。さらにここでは、「平和への呼びかけを誰がするのか」という新たな問いと共に、それは個々の教会ではなく、全教会会議だけであると明確に語った。それこそが、キリスト者個人よりも、個々の教会よりも、いっそう拘束的で、力ある言葉を語ることができると彼は考えた⁴⁹。この期待はさらに翌年の論文「告白教会と世界教会」でも表明される。

c) そこで最後に、三つ目に、1935年8月、『福音主義神学』に発表された重要な論文「告白教会と世界教会」⁵⁰を取り上げる。

周知のように本論文執筆の背景の一つに「ヒンツガウル拒否」と呼ばれる次のような出来事があった⁵¹。

それは、「信仰と職制」世界会議の継続委員会の総幹事L. ホジソンが、6月17日付けの手紙で、ボンヘッファーを、8月にヒンツガウルで開かれる協議会にゲストとして招待したのに対して、何回かの手紙のやりとりの後、最終的に7月18日の手紙でボンヘッファーがそれを断ったという挿話である。言うところの世界教会運動の立場から帝国教会にも告白教会にも出席依頼をするというホジソンの立場は、ボンヘッファーの到底受け入れるところではなかった⁵²。彼は自らの立場をこの「告白教会と世界教会」で示すことを望んだ。ボンヘッファーはこの論文を、1936年2月11日付けのN. カールシュトレームへの手紙に添えてホジソンにも送った (DBW14, S.378. Anm.1.)。

こうした中で、6月末から7月半ばにかけ、本論文は執筆された。ヒンツガウル拒否を

⁴⁸ S.300f. (124頁以下)

⁴⁹ 全教会会議への言及は以下に見られる。1932年夏学期ベルリンの講義「教会の本質」(DBW11, S.286f. [邦訳65頁]), 1933年夏学期キリスト論講義 (DBW12, S.316 [邦訳210頁]), 1933年「ユダヤ人問題に対する教会」(DBW12, S.354 [邦訳67頁])。

⁵⁰ Die Bekennende Kirche und die Ökumene, DBW14, S.378-399. (森野善右衛門訳「告白教会と世界教会」『告白教会と世界教会』)

⁵¹ Bethge, DB, 548-554. (邦訳3, 108頁以下)

⁵² DB, S.348ff. (邦訳3, 108頁以下)。H.J. マルゲル, 前掲論文, 参照。

機にボンヘッファーが、まだその将来が全く不透明な闘いの只中であって、世界教会と告白教会の歩むべき方向と線を示したのが本論考であった。最後の言葉に記されているように、ここに「問題は示された」⁵³のであり、「理想がではなくて、戒めと約束が示されているのであり——自分の力で自分の諸目標を実現することではなくて、服従が求められているのである」⁵⁴。

冒頭でボンヘッファーは、「告白教会の闘いは、その初めから、ドイツ内外のキリスト教会の非常に強い関心と同情のもとに、なされてきた」⁵⁵と述べ、過去二年間の「世界教会」と「告白教会」の出会いを振り返ることからはじめる。世界教会がドイツ・プロテスタント教会の闘いと苦しみにあずかろうとし、ファネーでは告白教会を明確に支持する決定にいたったことは事実で、それは一方で、それまでの両者の歩みを考えれば、「最大の注目に値する」⁵⁶ことではあった。しかし他方、その事実は、ドイツの教会にとって、たとえば自らの傷を外にさらさざるをえなかったという点で「非常に腹立たしい」⁵⁷ことであったかも知れない。しかしボンヘッファーにとって両者の出会いは「途方もなく約束に満ちた出来事」⁵⁸であった。世界教会と告白教会とは、互いに存在するためにこそ、問い合うことをしなければならないのである。

最初に、告白教会が世界教会へ提出する問いが取り上げられる。告白教会が世界教会に提出するのは信仰告白の問題に尽きる。そこでボンヘッファーは次のように述べて、問題に切り込む。

告白教会は、世界教会を、その全体性において、信仰告白 (Konfession) の問題の前に立たしめるかぎり、世界教会にとっての一つの真正な問いであることを意味する。

告白教会とは、ボンヘッファーにとって、「その全体性において、排他的にただ信仰告白 (Bekentnis) によってのみ規定されていることを目指す教会」⁵⁹である。しかもその場合、「バルメンとダーレムの教会会議の諸決定」、すなわち、『バルメン神学宣言』と「ダー

⁵³ DBW14, S.399. (152 頁)

⁵⁴ Ebd.

⁵⁵ S.378. (127 頁)

⁵⁶ S.382. (131 頁)

⁵⁷ Ebd.

⁵⁸ Ebd.

⁵⁹ S.382. (131 頁)

レム・メッセージ」の線に「拘束されて」⁶⁰ 解釈された信仰告白である。告白教会との対話者にとって、この信仰告白に対して、ただ然りか否かがあるのみであって、中立はない。その意味は、信仰告白が可能なかぎり真剣に考えられるということであり、告白教会によって拒絶された「いつわりの教えの教会」⁶¹、すなわち、ドイツ的キリスト者によって支配された教会とも対話するというようなことは、あってはならないのである。これが「告白教会からの問いかけ」⁶² であり、世界教会はこれによってたとえ「困難な内面的な危機」⁶³ を招来するとしても、この問いの背後に後退することは許されないのである。

告白教会からのこの問いかけの核心を、ボンヘツファーは、世界教会の教会性への問いの中に見た。そこで第一の問いは、次のようになる、「世界教会はその目に見える代表において教会なのだろうか。あるいはその逆に、新約聖書において証しされている教会の真の世界教会性は、世界教会の組織の中に、その目に見える、ふさわしい表現があるのだろうか」⁶⁴。ボンヘツファーは、世界教会自身の「内的発展」⁶⁵ も認めつつ、告白教会の登場によってこの問題への圧力が強められる中、世界教会が教会として明確な態度を取ったことを評価した。

そこで世界教会は後に退かなかった。世界教会は、ファネー協議会において、躊躇と内面的抑制とをもってではあったが、全く特定の諸点において、ドイツ的キリスト者の支配の教えと行動とを厳しく非難し、告白教会の側に立ったことによって、真に教會的な言葉を、ということは、すなわち、まさにまた審判者的な言葉を語ったのである。単純に事態の必然性に迫られてなされたこの発言は、神の戒めに対する責任ある服従から生まれた言葉であった。ファネー協議会において、世界教会は一つの新しい時代に入ったのである。それは、ある全く特定の場所で、世界教会の教會的な委託が世界教会に見えてきたのである。そしてそのことが、世界教会の永続的な意味なのである〔傍点、筆者〕⁶⁶。

第二の問いは、「世界教会は、いかにして教会でありうるか。またいかにしてその要求

⁶⁰ S.383. (132 頁)

⁶¹ Ebd.

⁶² S.384. (133 頁)

⁶³ Ebd.

⁶⁴ Ebd.

⁶⁵ S.388. (138 頁)

⁶⁶ S.389. (139 頁)

を基礎づけることができるのか⁶⁷である。ボンヘッファーにとって教会は告白する教会 (die bekennende Kirche) であり、教会の一致は信仰告白の一致にはかならない。「教会は、ただ信仰を告白する教会としてのみ存在する、すなわち、教会の主の味方し、この主の敵に反対して告白する教会としてのみ存在する。…教会の真の一致のためには、信仰告白における一致が必要なのである」⁶⁸。そうであれば、教会としての世界教会においてそのような信仰告白の一致は、どのようにして実現されるのか、それがここでの世界教会への問いであった。ボンヘッファーは、従来世界教会運動の推進者たちが、世界の教会の交わりを重視し、「全キリスト教の豊かな富と調和」⁶⁹を生かそうとしてきたことを取り上げ、それでは「世界教会の問題と教会そのものの持つ真剣さを覆い隠してしまうことに力を貸す」⁷⁰と指摘し、次のように言う。

ただ一致の中にのみ真理があるという命題が、いかに真実であり、聖書的であるとしても、同様に真実であり、聖書的であるのは、真理においてのみ一致は可能であるというもう一つの命題である⁷¹。

まさに真理が問題であるがゆえに——それこそが信仰告白において問題なのだが——告白教会は「反キリストの精神」⁷²の支配するドイツのキリスト者との対話を最後決定的に中断した。世界教会にも中立はない。ここで世界教会が——ファネーはそのことをなした——決断を下すことこそ、自らの課題に忠実なことであり、世界教会が教会でありうる道にかならなかった。この関連で述べられた以下の言葉は、直前にやりとりのあったL. ホジソンらが念頭に置かれたものであろう。「そこから自明的に出て来る結果は、このように中断された会話は、他の場所で、たとえば世界教会の協議会のようなところでもう一度取り上げることができるというものではない、ということである。告白教会の代表とドイツ的キリスト者の代表とは、世界教会の協議会において共に一つの対話の席にすわることはできないということを、世界教会は理解しなければならないし、またファネー協議会において、世界教会はそのことを理解したのである」⁷³。

⁶⁷ Ebd.

⁶⁸ Ebd. (139 頁以下)

⁶⁹ S.390. (141 頁)

⁷⁰ Ebd.

⁷¹ Ebd.

⁷² S.393. (142 頁)

⁷³ S.391f. (142 頁)

次に、逆に、世界教会が告白教会に対して問い返す。告白教会は世界教会から問いかけを受け、要求される。告白教会は、世界教会に向けたその同じ問いを今や自分に向けなければならない。それはまず、「罪の告白と悔い改め」⁷⁴をなすことを意味する。その前提に立って告白教会は世界教会の交わりに入ろうとしているか、というのが、告白教会への第一の問いかけである。

ここでまさに、真理のために誠実であろうとする教会は、まさにその真理のために先ず何よりも聞くことへと召されているのではなかろうか。ここでまさに、狭いドイツの中であって、その目を限界の向こうにまで向けることの困難な教会は、よく注意しなければならないのではないだろうか。ここでまさに、生存をかけた闘いの中にある教会は、全キリスト教界の祈りと交わりとに対して、感謝しつつそれを聞き分ける耳を持たねばならないのではないだろうか⁷⁵。

第二の問いかけは、告白教会が、自らの信仰告白の要求をもって自らを孤立化させ、世界教会に耳を貸さないようなときに、はたして告白教会自体の中に、それでもキリストの教会は存在するのか、というものである。世界教会は教会かという告白教会の問いは、告白教会は教会かという問いとなって跳ね返ってくる。ボンヘッファーによれば、告白教会は自ら世界教会運動に参加し、神学的かつ実践的に運動に共にあずかることを通してこれに答える以外にない。

告白教会は、世界教会が兄弟として助け、兄弟として忠告し、兄弟として抗議する権利を、常に承認し、そのことによって、キリスト教界の一致とイエス・キリストへの愛は、すべての限界を突破するということを証しするであろう。告白教会は、その兄弟の声を決して恥じることはなく、その声に感謝して耳を傾け、また与えることを求めるであろう⁷⁶。

さてボンヘッファーは最後に、すでにファネーで明確に語った全教会会議への希望を改めて語った。そしてその射程を、たんにキリストの教会の「真理との一致」⁷⁷を証しする

⁷⁴ S.394. (145 頁)

⁷⁵ S.395. (246 頁以下)

⁷⁶ S.398. (151 頁)

⁷⁷ S.398. (152 頁)

だけでなく、その証しが敵にも届いて「戦争や、階級的憎悪や、社会的搾取」⁷⁸ に対しても裁きの言葉が語られ、現実には「戦争そのものが不可能になる」⁷⁹ ことまでも含めて構想した。ボンヘッファーはその成否はわれわれの服従にかかっている、詳しく言えば、神がこの服従をいかに用いてくださるかにかかっていると述べて全体を締めくくった。

d) ここまでわれわれは、ボンヘッファーの世界教会運動を、1932～35年の三つの文書によって瞥見した。最後に、それをバルトの立場との比較において、逆にバルトの立場をボンヘッファーのエキュメニズムとの比較において見ておきたい。

1 前節ですでに言及したように、フィセルト・ホーフトは、バルトの『教会と諸教会』(1935)を一方で高く評価しながら、他方でバルトは世界教会運動について理論的に肯定し実践的に否定したという判断を下し、それに対し、どちらでもないもう一つの道を示したのが、同じ年に書かれたボンヘッファーの「告白教会と世界教会」であったと言う。世界教会がまだ形成途上であった中で福音の歪曲に対して福音の真理を共に告白するということが——前年ファネーでなされたように——可能だということを、またそのようにして世界教会運動の中で一つの教会が現出するということが可能だということを示した、と。フィセルト・ホーフトによれば、1935年のバルトはそれをはっきり見ておらず、それを認識したのは1948年のアムステルダム大会であったと言う⁸⁰。たしかにバルトは『教会と諸教会』の段階で、ボンヘッファーの主張した全教会会議のようなことは構想していなかった。ただそれを認識したのは彼が判断するように1948年にはじめてであったかは、1935年以後、とくに1938年以降の大戦中のバルト自身のエキュメニカルな活動を検証しないと、簡単には言えないように思う。いずれにせよ、従来世界教会に批判的立場を取り、1935年になってその態度を大きく変化させつつあったバルトと、早くから世界連盟を通して世界教会運動に深く参与していた青年ボンヘッファーでは、当然のことながら、その認識の程度や広さに大きな相違があった。

2 それでもバルトとボンヘッファーとの間には、重要な一致点が見られる。1933年に始まる教会闘争、とくに1934年5月のバルメンの出来事(『バルメン神学宣言』)や秋のダレムの第二回告白会議をへて明瞭になったバルトの認識との一致点を明らかにしておきた

⁷⁸ S.399. (152頁)

⁷⁹ Ebd.

⁸⁰ Vissel't Hooft, Karl Barth und die Ökumenische Bewegung, in: Die Zeichen der Zeit, Nr.35, S.121-136, 1981. Vgl.E.Feil, Karl Barth und Dietrich Bonhoeffer, in: M.Beintker, Chr. Link, M. Trowitzsch (Hg.), Karl Barth im europäischen Zeitgeschehen [1935-1950], Widerstand-Bewährung-Orientierung, 2010.

い。じっさい『バルメン神学宣言』を想起させる文言はボンヘッファーの文書にもくり返し現れた。

第一に、われわれは、両者とも世界教会の教会性を問うていることを指摘したい。世界教会は或る種の目的組織でも、たんなる友好団体でもない、それは教会である、ということからチェルノホルスケのボンヘッファーは出発した。その教会は、彼において、地上におけるキリストの現在にほかならず、そこから教会としての世界教会の言葉の権能が説明された。同様にバルトにおいても、教会の一致の問題を通して、じつは教会としての世界教会のことが問われていた。「イエス・キリストが教会の統一性であり、諸教会〔諸教派〕の多数性がわれわれ自身の困窮であるとき、諸教会〔諸教派〕を教会へと一つにすることが課題であるという事実、しかもそれは教会の主から出された課題であり、戒めであるという事実を避けることはできない」⁸¹。ただバルトにおいては、教会の統一はすでにキリストにおいて与えられており、それは、その教会の統一に対するわれわれの服従においてのみ「見出され、承認されうる」⁸²ものとしてあった。諸教会〔諸教派〕が、世界教会の運動において、教会の問題、すなわち、教理や秩序、それに生活などの問題にまじめに取り組むときに、「それらの運動それ自身が教会形成的に働く」⁸³。その時キリストにおける一致は見出され、「これらの諸教会〔諸教派〕の中で自動的に教会が出来事となり、可視的にもなるであろう！」⁸⁴。これがバルトにおける、いわば出来事としての世界教会論であった。

第二に、バルメン、ダーレムと、第一回と第二回の告白会議の後に、ボンヘッファーにおいてもバルトにおいても、「信仰告白」が問題の中心に移動した。何よりもわれわれはファネーの『決議』そのものを信仰告白と受けとめることが許される。「告白教会と世界教会」では、世界教会と告白教会、それぞれ、告白する教会であるかが問われた。バルトが『教会と諸教会』で信仰告白の一致を教会の一致として要求したのとほとんど同じ言葉を、われわれは、ボンヘッファーの「告白教会と世界教会」に見出すことができる。「教会の真の一致のために、信仰告白における一致が必要なのである」⁸⁵と。信仰告白における一致は、ボンヘッファーにおいて、真理における一致であった。それゆえ信仰告白は、教会の主への信仰の告白であるとともに、反キリストをはっきり退けることと結びついていた。バル

⁸¹ Barth, Die Kirche und die Kirchen, in: Theologische Fragen und Antworten, S.223. (傍点, 筆者)。

⁸² S.225. (傍点, バルト)。

⁸³ S.229.

⁸⁴ S.230. (傍点, バルト)。

⁸⁵ DBW14, S.389. (140頁)。

トもまた、教会の一致を真理への一致において求めていたことは、以下の文言にも明らかである。「キリストの真理を問うことは、いつも希望にあふれたこと、またいつも愛に満ちたこと、またいつもそしてどんな事情のもとでも諸教会〔諸教派〕の一致に役立つ」⁸⁶と。

バルトの『教会と諸教会』は、バルトの「バルメンの世界教會的重要性を巡る格闘」(K. ホフマン)の一つであったが、ボンヘッファーにおいても同様のことが言えであろう。興味深いのは、バルメンの二年前のチェルノホルスケ教会講演に、バルメンを先取りするような文言が見られることである。すでに引用したが、イエス・キリストの支配の外に生の自律的領域というもの存在しないという言葉は、ほとんどそのままバルメン第二項の拒絶命題と重なる。バルメン以後のファネー講演における以下の認識は、キリストの支配のもとでの兄弟たちの共同体というバルメン第三項の教会論のその広がりにおけるこだまとしてわれわれに響く。「キリストの教会は、同時にすべての民族の中に、そしてしかもすべての民族的・政治的・社会的・人種的なものの限界を超えて生きるのである。そして教会の兄弟たちは、彼らが聞いているひとりの主キリストの戒めによって、共通の歴史や血や階級や言語が人間を結びつける紐帯であるよりもっと離れがたい力で、お互いに結びつけられているのである」⁸⁷。さらに「…教会の語る言葉は、国家にとっては権威をもたない。しかし国家はその言葉の中に、国家の可能性の批判的限界を見出し、したがって教会を、国家の行為の批判者として顧慮せねばならないであろう」という認識において、一方で伝統的なルター主義に立ちながら、それを超えて、教会の政治的共同責任を語るバルメン第五項を思い起こさせる。

もう一つ最後に付け加えておきたい。「告白教会と世界教会」は信仰告白の一致を一つのキー・ワードとして全編がバルメン＝ダーレムの線に立った論考であることは、すでにc)で述べた。その中でボンヘッファーは、ドイツ的キリスト者の支配する帝国教会との対立の中にある告白教会の告白は先ず第一に罪の告白でなければならない、告白教会は「キリスト教界の分裂の罪責を共に担う」⁸⁸、「この罪責の一端を自分も担い、そこで出会うかも知れないあらゆるいつわりの神学の中で、先ず自分の罪と、自分の宣教の働きの無力さを告白するのである」⁸⁹と語る時、『教会と諸教会〔諸教派〕』でバルトが教会の多数性を罪として次のように語るのと違わない。「教会〔教派〕の多数性を人は説明しようとしてはならない。…人は事実として承認すべきである。中間に入り込んできた不可能事とし

⁸⁶ Barth, Aao, S.232.

⁸⁷ DBW13, S.299. (122 頁)

⁸⁸ S.393. (144 頁)

⁸⁹ Ebd.

て理解すべきである。人はそれを、われわれ自身が自らに担わなければならない、そこからわれわれ自身を解放することのできない罪責として理解すべきである」⁹⁰。

3 さてボンヘッファーは1937年2月、オックスフォード会議の準備のためのロンドン委員会の後、青年書記を退いた。ジュネーヴの世界教会と告白教会の関係は、会議への招待問題を巡り事実上断絶した⁹¹。周知のように彼は1939年には政治的抵抗の道へと入っていくことになる。一方バルトは、バーゼルに移って（1935年）以来、フィセルト・ホーフト、ピエール・モーリーらとの交流を通して世界教会との関係を深めていく。しかし『教会と諸教会』でも表明されていた現実の世界教会運動への疑念はつづいており、1937年のオックスフォード、ケンブリッジ、それぞれ「生活と実践」、「信仰と職制」の世界会議にも参加しなかった。1938年、ヨーロッパが政治的危機に陥ってから、戦争の期間、彼は、世界教会とのつながりを通して、主として文書により、一人で活動をつづけることになる。戦後最初の出版『一つのスイスの声 1938-1945』に収められた種々の講演とエキュメニカルな公開書簡はそのことを如実に物語る。そこでは、教会闘争が政治的抵抗を含むほかないことが明白に語られ、戦争中のジュネーヴ（世界教会運動）に対しては、告白的な、明確な、勇気と慰めの言葉をキリスト教界と世界へ向けて語るようくり返し要求した。それがジュネーヴから何も聞かれないまま、彼は「一つのスイスの声」となって語りつづけた。ボンヘッファーの構想した「全教会会議」をバルトが考えた形跡は確認されないが、全世界に対するイエス・キリストの言葉を聞こえるようにするという、ボンヘッファーが全教会会議に託したのと同じ課題に、バルトもまた固執しつづけた、と言うことはできるのではないだろうか⁹²。

（以下、次号へ続く）

⁹⁰ Barth, AaO., S.220.

⁹¹ Bethge, DB, S.619ff. (邦訳 3. 222 頁以下)

⁹² 拙稿「世界教会とカール・バルト——1938～45年のエキュメニカルな公開書簡を通して」（平成19年度～23年度私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」研究成果報告書第五集、197～209頁）、参照。Vgl.E.Busch, Karl Barth im Zeitgeschehen.》Eine Schweizer Stimme 《zwischen 1935 und 1950, in: M.Beintker, Chr. Link, M. Trowitzsch (Hg.), Karl Barth im europäischen Zeitgeschehen [1935-1950], Widerstand-Bewährung-Orientierung, 2010.